
Gothic kitty

亞人子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G o t h i c k i t t y

【Nコード】

N 2 7 8 5 E

【作者名】

亞人子

【あらすじ】

…とある事件の末に人間界・下界・に墮とされた少年　下界で10年の月日経ち、彼に不思議な使者が現れた……

第一章 監獄の城

イギリス エイヴオン町

その町はとても観光客が多く、明るい人達で活気だっていた。

町の郊外に、町の雰囲気とはまるで正反対の深闇に大きな城が聳え建っていた。

不気味な雰囲気に包まれた城の大きな門には、誰も出入り出来ない様に乱暴に鎖が巻かれている。深夜の雲の隙間から覗く青白い月光に照らされてその正体が露にされている。

壁中には古びて伸びきったツタが、城の不気味さを陪乗させる。

近付く者を全て追い払うかの様な不気味さのせい、町の人は一切その城周辺に近付こうとしない。

その城の事を、町の人は”監獄の城”と呼んでいた。

* * *

とある日の夜中、その城の前に白いシルクハットを被った男が現れた。

鎖が硬く張り巡らせている門の前に来ると、手に持っていたステッキで横暴に巻かれている鎖の中心にある錠前を軽く叩いた。

すると城の雰囲気には場違いな金属音を発すると、張り巡らされていた鎖がジャラジャラと外れ門がゆっくりと開いて行った。その奥は霜が降りていてよく見えない。

男はニツと口を引きつりさせ、余裕な表情を見せると迷い無く門をくぐり抜けた。

全く手入れされていないと思わせる程荒れている広い庭園を進んで行くと、青白い城の正面に辿り着いた。

男は表情を変えずに巨大な扉の前に立ち、難なくドアノックカーを叩

いた。

暫く何も動きを見せなかった扉が、「ギィ」という不気味な音を発しながら開いた。長年使っていなかったのだろうか。

男はわざとらしく後退りしてから中に入っていた。先は暗くて全く見えない。

巨大な扉は男が入ったのを確認したかの様に、男が入ると急に勢い良く閉まった。その音に驚いたのか、黒い鳥達は慌てて飛び立つて行く。

城の中は全くと言っていい程暗く、闇の世界が広がっていた。

唯一の助けとなる、大きな窓から差し込んで来る青白い月光を頼りに、部屋の中央に張り巡らされている螺旋階段に向かって足を進めた。

螺旋階段を上り終えると、そこから続く長い廊下がある一室に向かって伸びていた。

男は躊躇無くその部屋に向かって歩き出した。城中にステッキが床に接触する音が響く。

部屋の扉の前に辿り着いた男は、優雅に「コンコン」とノックした。すると、キィという音が鳴るのと同時に扉が開いた。

そこには、一人の人間がソファに座っていた。

* * *

その大きな瞳は男を見上げている。男はシルクハットを華麗に取ると、姿勢を低くして挨拶をした。

「初めマシテ。私はブルムダーク魔法学院魔法薬学教授を承りし者、名をバウスフィールド・セシルと申します。」

ニコッと笑むと傍にあった椅子に優雅に腰掛けた。少年らしき人物はぼけーっとしている。

「いきなりですが、コレを。」

セシルはその表情の俛、胸ポケットに探りを入れて手紙らしい物を取り出すと少年に渡した。

「……」

少年は渋々受け取り、きょとした表情の俛手紙の内容を目で読んだ。

「ブルムダーク魔法学院入学手続き及び魔法界入界届け……今回は貴方の魔法界への入界許可と共にブルムダーク魔法学院の入学許可をお知らせ致します。ブルムダーク魔法学院入学手続きの方は次の項目にある道具及び指定物の方を……中略……我一同、貴方の入学を心から歓迎致します。ブルムダーク魔法学院教員一同、魔法大臣一同」

手紙を読み終えると、少年はセシルに向けて疑問符を飛ばした。

「これは……？」

セシルは「そうですねエ」と呟いてから

「説明するより、実際行った方が分かりやすいと思いますヨ？」

そのセシルの言葉に促される様に少年はコクツと頷いた。

セシルはそれに満足したのか、椅子から立ち上がると部屋の一角にある大きな煉瓦作りの古風な

暖炉の前に足を進めた。

「？」

少年も首を傾げると危なっかしく暖炉の方に行った。炎は吉か凶か点いていない。

「良かったデス。炎が点いていたら魔法界へ行けない所でシタ」

セシルは独特の笑みで少年の心が読めたかの様に言った。しかし少年はまだぼーっとしている。

「さてと。……暖炉の中に入って下サイ。」

少年を暖炉の中に入る様促すと、自分もそれに続いて暖炉の中に入った。暖炉の中はセシルと少年が入ってもまだ余裕がある広さだった。

セシルは再び胸ポケットから何かを取り出し、右手で握った。

「いいですか。しっかり掴まっけて下さいヨ？ でないとバラバラになりますカラネ。」

冗談なのか本気なのかよく分からないセシルの言葉通り、相手は案外素直にセシルの腕をしっかりと握った。

「では…」

セシルは右腕を肩の高さまで上げると、何かを呟いて握っていた右掌を開いた。

「ブレイク横丁へ」

すると青白い炎が二人を包み、一瞬のうちに炎共消え去ったのだ。

第二章 不思議な世界

「目を開けても良いですヨ。」

そんなセシルの声を聞いて、ゆつくりと瞼を開いた。視界に広がるのは暗い、酒の匂いが立ちこめる空間だった。

「ここは…？」

ゆつくり暖炉から出ると、明らかにさっきいた場所ではない事を痛感した。

「ここはただの酒場です。こつちへ…」

進まぬ足取りでセシルの後を付いて行くと、その店から出て来ていた。

「そうですねエ……。魔法界へ、ようこそ」って言うておきます力。」

そんなセシルに導かれる様に外の風景を直視した。

「……………」

その賑やかな横丁を眺めると、様々なモノが視界に入り込んで来た。不思議な物を売買している人、店の前に動物が入った檻が置いてあったり、ショーケースの中を羨まし気に見つめている少年達、お菓子専門店では看板に巨大なロリポップ・キャンディが飾ってある。ふと空を見上げると箒を使って飛んでいる人もいた。

「面白そうですね？ この世界。」

セシルが少年の顔を覗き気味に言ってきた。少年は驚いたのか少し顔を引っ込める。

独特な笑みを浮かべせると、セシルは少年から顔を遠ざけ、左目を

左手で覆わせて横丁を一瞥した。

「そう見えるんでしょうネ。……下界ではどれもあまりにも幻想的な事ばかりですカラ……」

その言葉を聞いた少年は目を一瞬見開き、目線を当たりに漂わせた。少年の反応を見ると急に笑みが消え、セシルは右の方にくるつと方向転換した。

「……？」

疑問符をセシルに向けると、セシルは顔を後ろに振り向かせて笑んだ。

「では行きましょうかネ？ 時間は勝手に進んで行くモノなんです。」
少年は言葉を発さずにコクツと頷き、セシルの斜め後ろに足を進めた。

セシルは横目で少年の動きを感じ取るとそのまま横丁に進んで行った。

少年は横丁の店を目で見ながら楽しんでた。これが魔法界という世界 - モノ - か……

すると無意識に綺麗な桃色の唇から言葉を発した。

「なんで自分を魔法界 - ここ - に連れて来たの」

セシルは急に歩みを止めると、いきなり笑顔で振り向いて人差し指と親指だけを出し、手首を傾けた。

「…此处、入りましょう力？」

セシルの人差し指は、横にあった”不思議な飴”と書いてある店を指していた。

* * *

「何か食べたい物が在れば言っして下さいヨ？ 好きな頼んであげます。」

セシルはメニューリストを少年に渡し、シルクハットを取って椅子に引っ掛けた。

「……」

少年は無意識に人差し指を口にくわえ、食べ物の名を目でなぞっていた。初めて目にする名前ばかりのせいか少し首を傾げている。

「そうですね……パフェなんてどうでしょう？」

「……ばふえ？」

人差し指を口から放し、メニューリストから目を離してセシルを見つめた。

そのあまりの無垢さにセシルは目を見開き、手を握り「ククク……」と笑った。

「パフェですね？ 分かりました。……すみませ〜ん、チョコパフェとエスプレッソ1つ。」

ウェイトレスにそう注文すると「畏まりました」と答えてカウンタ―へ戻って行った。

「……さっきの話に戻ると、」なぜ自分の様な人間を魔法界へ連れて来たのか” と言っていましたよネ？」

セシルは急に話題転換させると、少年の瞳を自分の紅い眼で直視した。

「理由は簡単です。“アナタが魔法界の人間だから”……ですヨ。」
そう言うとセシルはいつの間にか来ていたエスプレッソを一口飲んだ。少年も暫くセシルの言葉を頭の中で繰り返してから運ばれて来たパフェのスプーンを手にとった。

「詳しくは教えられませんが。……上からの命令デスので。」

ニコツと笑むと、再び白いコーヒークップを口元に運んだ。少年はスプーンを口に運び入れては頬をもう片方の手で覆っている。頬が桃色に紅潮したのを驚いているようだ。

セシルはそんな少年の様子をじーっと眺めていると、いきなり胸ポケットから懐中時計を取り出した。綺麗な細工が施されている。

「早く食べちゃって下サイ」

ボソツと呟くと再度エスプレッソを口にした。最後の一口を口に含んだ少年は、頬に手を置いたまま初めて犬を見た子猫の様な目をセ

シルに向けた。

「では行きましょうカ。」

独特な笑みで言うのとサツと椅子から立ち上がった。少年も吊られる様に立ち上がり、セシルの傍に寄った。

「…次は銀行に行きましようかネ？ 入学する為の準備を色々しなきゃなりませんから。」

店から出ると、開口一番にセシルが言った。少年はぽかーんとしている。そんな少年の鼻をふにと人差し指で押さえるとセシルは近距離で少年に笑顔で言った。

「ボーっとしている時間はありませんヨ。それにもっと魔法界・ココ・が知りたいンなら丁度良いと思いますガネ？」

驚いた少年は少し身を引いたが、その言葉を聞くと案外素直にセシルの後について行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2785e/>

Gothic kitty

2010年10月15日00時24分発行